
IS 名前を言ってはいけない島の住人達

間宮 愁死

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 名前を言っではいけない島の住人達

【Nコード】

N9399W

【作者名】

間宮 愁死

【あらすじ】

ISの使えない者たちで、更に社会から捨てられた者たちがまた社会によって翻弄される中、社会に復讐する物語。

プロローグ

十数年前、ISが開発されたがために女尊男卑が当たり前となった世界。

そこでは火器などの旧兵器となったものが捨てられるゴミ溜めがあった。

どこの国のものでもなくなり、ゴミ溜めとなったのは

択捉島。

なぜなら、ISが日本で開発され日本で作られたのだから・・・

2

日本はISという兵器の政治的・軍事的利用法を間違え、世界に足並みを揃えさせてしまう。

その一つがアラスカ条約。

正式名称は、「IS運用協定」。IS条約とも呼ばれる。

軍事転用が可能になったISの取引などを規制すると同時に、ISの技術を独占的に保有していた日本への情報開示とその共有を定めた協定。

そこで新たなロシアとの領土問題の解決、そしてアメリカ領のアラ

ス力からの距離、中国からの距離など様々な条件が重なり択捉島は合法的な旧兵器のゴミ溜めで無法地帯となった。

なおIS学園もこの協定に基づいて設置されている。

本来なら無機物だけが捨てられるはずだった。

しかし、ISによる女尊男卑の風潮が世界中に広まり、子供でも女子を大切にするようになった。

そのため男の子供の不法投棄が起こった。

そして食うものは限られ、奪い合い。殺し合い。

最終的に 共食い。

より強いものしか残れない過酷な環境が出来上がる。

この無法地帯である島でのルールは一つだけ『弱肉強食』である。

島の住人 一人目

隔絶された島で弱肉強食というルールなため食物連鎖の頂点というものが存在する。

その者は最古参の人物で第一次、第二次生存闘争の覇者である。

そして第二次生存闘争では他が徒党を組んだりする中、一人で戦い抜き、覇者となった。

しかし彼が二次闘争で徒党を組まなかった理由は衝撃的なものだった。

「一次はよかった。最高だった。だって相手も生き残るために殺されること覚悟で殺しに来るんだからな。

でも二次はクソだった。徒党を組み相手を威嚇して、ビビった相手だけを殺す。そんな殺される覚悟のねえ殺戮なんざここには必要ねえ。」

ここで必要なのは死を恐れ、死を覚悟する。

そして生き残るために泥臭く這いずり回る事だ。

だから俺は徒党を組まず挑んだ。殺される覚悟のねえ奴に死の恐怖をより強く味あわせるためにな。」

要約すると「相手が気に食わなかったから無謀にも一人で挑んだ。」
こういう事だ。

イカれてる。

そうとしか言いようがない。

そして彼の存在意義は3つしかない。

それは

- ・死を恐れているものには攻撃しない。
 - ・殺される覚悟の無いものには死の恐怖を味あわせる。
 - ・殺される覚悟もなく殺した奴は殺す。
- である。

この3つが彼の全てであり、その他は無い。

いや、根本的なところを忘れていた。

それは、彼が殺人嗜好主義者 殺人鬼だということだ。

第二次生存闘争が終わり、島は落ち着きを取り戻した。

そのため彼はとてつもなく暇になってきていた。

「あ”あゝ、暇だ。」

(しかし、最近は殺される覚悟のある奴しかいないな。)

そう思いながら顔を青く晴れた空に向ける。

すると上空に影が浮かぶ。

そして島に降りてくる いや、落ちてくる。

そしてその影は轟音とともに降り立ち、島の人間を虐殺し出す。

「……………うん、なんだ!？」

その状況に驚き声が漏れる。

そのため辺りには濃厚な血の匂いと叫び声と機械的な駆動音が充満する。

「ハハ、威勢がいいねえ。俺を楽しませてくれよ。」

しかしその匂いと音によって彼のテンションは最高潮に達し、獯猛な笑みを浮かべ、その影に向かって駆け出す。

彼が落ちてきた影が目視できる範囲に入る。

するとそこにはコスプレ紛いの機械でできたパワーワードスーツに身を包んだ女性だった。

そしてその女性と彼は相對する。

相對する彼はぼろ布に身を包んだ体の大部分を火傷した姿だった。

「おい、てめえか？ この殺戮を起こした野郎は？」

「肯定します。しかし私は野郎ではありません。」

「あん?? こまけえことはどうでもいいんだよ。この匂いの原因がお前だつてことさえわかればなッ！」

そう言葉を切つて殴りかかる。

しかし、彼女が纏っているものはISと呼ばれる現状最強の兵器であり、シールドバリアーというものがあるため彼の拳は無常にもバリアーに阻まれ届かない。

それでも彼は殴り続ける。

気に入らない存在を殺すために。

しかしその攻撃は届かず、無常にも全てバリアーに阻まれる。

そして、ISは銃口にエネルギーを溜め始める。

それを機に、前にも感じた死の感覚を感じた彼はとつさにバックステップを取り、一気に戦線から離脱する。

しかし、その攻撃は彼の右腕を掠め、そのまま直進し、彼の背後にあった瓦礫の山を消滅させる。

瓦礫の山を消滅させるほどの威力だったために、掠めただけの腕も消滅してしまった。

しかし相手からは殺意と言つものが感じられなかった。

それが彼を怒らせる。

そして残った腕でその辺にあつたものを握り、自分の限界を超えた力で叩き込む。

それは、シールドバリアーを突破し、相手に僅かな傷、ダメージを与えることが出来た。

しかし、それだけでそれ以上のことは出来なかった。

そして相手の機械の纏った腕が振り抜かれる。

ギリギリで防御が間に合うが体が浮き、吹き飛ばされる。

数十メートル飛ばされ、壁にぶつかり、止まる。

その衝撃で彼の心臓は停止する。

そのためISのハイパーセンサーは生体反応LOSTと表示される。

閑話1（前書き）

とりあえず。少しですが投稿しておきます。

島の住人2もほぼ出来ているのですが、手直し等があるのでまだと
いうことで。。。

閑話 1

隔絶された島といっても択捉島は一人で治められるほど小さくはないし、さらに要らなくなつたとは言つてもISが出来る以前までは普通の人間よりは強者だつた者達が多数存在する。

今トップに立っているのは個としての最強、殺人鬼だが、北と南と西に強い組織が存在する。

南にいるにはドイツの試験管ベイビー達で女性型に組み込む物の生体実験用とされ廃棄された者たち。軍隊型の組織で昔の階級が名残として残っている。

北にいるのはアメリカの機械強化人間達で不運な事故で手を失つたものや、足を失つた兵士に機械の手足をつけて強化するという実験のサンプルである。武装は標準からピーキーなものまで幅広くある。

西にいるのは中国のオカルト超能力人間達で脳波を出し相手にテレパスするものや、相手に幻想を見させるもの、多数の人格を持つものなどである。数に任せた圧倒的な人体実験の成果である。

閑話1（後書き）

アンケート。

というか能力募集。

西の超能力者の設定が決まりません。どなたか考えてください。

ネタばれになりますが、殺人鬼とスピード狂とテレパスのような人形遣い（1体のみ）とマッドな医者と鬼才科学者は出てきます。

それ以外でチートに成らない程度でお願いします。

島の住人 二組目

辺りに生体反応がなくなったISは次の狩場として下の南に向かう。

「大尉！ 認識不能未確認航空物体がこちらに向かっています！」

それに気づいたサーチャーが声を上げる。

「軍曹。それは本当か？」

そのありえないことに対してトップの大尉は冷静に確認をする。

「はい！ 間違いありません！ もう肉眼で見える距離まできます！」

しかし、目視で確認できたためそれは間違いの報告ではなく本物だった。

「ッ！ 全員、対衝撃体勢をとれ！！」

見たこともないものに一瞬硬直するが、すぐさま命令を放つ。

しかし、その発言と同時にISが勢いそのまま地面に突っ込む。

それは長距離弾道ミサイルが落ちたような衝撃で、対衝撃体勢をとれなかったものは無常にも吹き飛ばされる。

そして一緒に巻き上げられた石や鉄屑などで肉を抉られ、引き千切られ、物言わぬ屍とされる。

生き残ったものたちはすぐさまISに向けて攻撃を始める。

軍隊のように統率の取れた一斉攻撃を。

しかし、四方八方から一斉射撃されたにもかかわらず、ISは足を止めることなく弾幕を無視して殺戮を始める。

それを見て圧倒的戦力の差を感じた大尉は命令をする。

「中尉、軍曹は出来るだけの人数を連れてここから逃げる。少尉は俺と一緒に残ってくれ。」

「しかし、大尉！！ それではあなたと少尉が危険すぎます！！ 肉の壁になるとでも言うのですか！！」

そこで中尉が反論する。

「中尉、これは上官命令だ。」

が、有無を言わさぬ威圧的な態度で大尉が言う。

「ッ、了解いたしました。」

その雰囲気を押され中尉はしぶしぶ引き下がる。

「なに、右手一本失っても帰るさ。それに少尉もそれ以外の兵士達もいる。」

そこで大尉は軽口をたたく。

「……ッ、そ、それではまたあとで。」

搾り出すように中尉は言葉を発する。

そして切り替え他の連中に声をかける。

「たった今、隊長から分団すると言言葉が聞けたはずだ。我々はこれから生き残ることを前提に中央に向けて撤退を行う。ただし途中で倒れたやつの方が上だとしてもかまわずに逃げる。この作戦は生き残ることだけを意識した作戦だ。全員、脇目を振らず逃げる！」

中尉はすぐさま後ろを向き逃げる隊員を引き連れて駆け出す。

「………ああ、達者でな……。」

それを大尉は中尉に背を向け敵を見据えながらヒラヒラ右手を振って言葉を漏らす。

「………行ったか。悪いな、少尉。こんなことにつき合わせてしまった。」

さっきまでとは雰囲気が変わった大尉が言葉を発する。

「いいえ。我々はあなたがいなかったらとつくに死んでいます。それに、大尉とともに死せるなら本望です。」

その言葉に少尉は何もない右目を指し答える。

「そうかい。でもな、俺はお前を死なせる気はないぜ。それに危険なここに残したのは最後の授業を見せるためだ。てめえは俺より頭がいい。だから、俺はこれから玉砕覚悟で戦闘しアイツから撤退時間を稼ぐ、足運びからフェイントの入れ方細かいところまで見逃さずに全て見て頭に叩き込め。……そして一番大事なことだ。ヤバイと思っただらすぐに逃げろ。以上だ。」

そして大尉は少尉の言葉を流し助言し、兵士達に向けて言葉をつむぐ。

「生き残りし各兵士に告ぐ、これより完全に命を捨てた作戦を実行する。怖いものは中尉について逃げる。しかし忠告しておく。この先何が起こるかわからない。この島でいつも道理、殺して食うだけの生活かもしれないし、狂乱に満ちた日々かも知れない。理解して残るものは残れ、去るものは去れ。咎めはしない以上だ。早く決断しろ、敵はもう間近まで近づいている！！」

そして少し時間がたち、大尉は辺りを見回す。

「これで全員か。」

予想以上の少なさに声が漏れる。

しかし少しでも残ってくれた兵士達に激励の言葉をかける。

「これからあのわけの分からん理不尽な機体に対し我々は死を恐れ
ない後方を守る盾となる。決意の固まったものから俺に続け！ 先
陣は俺が着る！！」

そう言つて、彼は右目の眼帯を外し戦場に真つ先に姿を現し、特攻していた。

それを見て他の兵士たちも続く。

ガガガガ、ガガガガガ。

敵の銃声が響き、辺りにいる隠れ遅れた兵士達が最後の死の踊りを踊る。

「クソツ！！　ここまでか。」

ある程度予想していたがそれ以上に敵の攻撃能力は高かった。

そのため予想以上の被害を受け、ろくに時間を稼げずにいた。

そこで大尉は最悪の場合にと考えていたことを行動に移す。

「生き残つた兵士に告ぐ。誰でもいいから後方にいる少尉だけを呼べ。ただし俺が生き残っている間にだ。急げ！！」

服が血で真っ赤に染まり、赤以外のところといえば血の気のない真っ青な顔ぐらいの兵士が寄つてき、倒れながら言葉を伝える。

「しよ、少尉、大尉が・・・お呼びです。」

「そうか、わかった。ゆっくり休め。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

労いの言葉をかけるが、兵士から返事はない。

死んでいる。と感覚的にわかった少尉は急いで大尉の下に駆ける。

駆け寄った大尉は全身から血を流し建物に寄りかかっていた。

「よう、早かったな、少尉。お前に・・・・・・・・ツ・・・・・・・・やって・・
・欲しい事が・・・・・・・・出来てな。」

そう言いながら、左腕で自分の左目を抉り、切り落とされた右腕を
拾い、左目を握らせる。

「こいつを、中尉に届けてくれ・・・・・・・・！あと、・・・・・・・・約束を
守れずにすまんともな・・・・」

それを少尉に渡しながら建物に手を当て、ゆっくりと立ち上がる。

「ゴフツ、・・・・・・・・野郎ども！！行くぞ！！！！」

口から血が出るが、関係ない。

命令の口調がいつもと違っていても関係ない。

ただ、死ぬことは確定である。

そんな中で、一秒でも、いや一瞬でも長く奴を止めるために声を上げ突撃する。

「ジークハイル勝利、万歳ッ！！！」

とっさに出た言葉はこの島に来てからは使っていないドイツ語だった。

故郷に捨てられ、もう二度と口にすまいと固く誓ったあの言語。

しかし後続の兵士達は自分に続き次々と口にし自分に続き突貫する。

そのことで、やはりどれだけ祖国を捨てようとしても捨てられないんだなという思いを持ちながら大尉は死んでゆく。

閑話2

南を潰し、ISの搭乗者はとりあえずは一息入れる。

（しかしこの島の住人は思ったより強い。予定よりもエネルギーが減ってるけどあとをぐると時計回りに生体反応が集まっているポイントを2箇所を潰せばいいだけ。それで今回の任務は終了。行動再開。）

任務というのは『新機体のテストとしてこの島の住人達を殺せ』というもの。時間も人数も決まっていない。ただ、一通り殺せということだけのこと。だから彼女は生体反応が集まっている拠点のようなどころを潰して回っている。

時計回りに回ると決めたISは西に向かう。

閑話2（後書き）

次話投稿しました。

ネギまととあるもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9399w/>

IS 名前を言っはいけない島の住人達

2012年1月6日00時47分発行